体験された風景の構造

堀 原 正 繁*
栗 原 夫**
篠 原 修*

On Structure of Experienced Landscape

Shigeru HORI
Masao KURIHARA
Osamu SHINOHARA

摘要：自由記述によるアンケート調査を実施し、三つのキーワードによって記憶されている風景を喚起し、その内容を構造化して捉えた。「印象的な風景」は人間側（体験）よりも対象側（物理的要素、空間）の軸が主要となる構造であること。「なつかしい風景」は風景のなかの自己体験が主要であり、対象・人間ともに主要な軸となること。「いやな風景」は人間側が主要であり、かつ複雑な構造となっていることなどがわかった。

1. はじめに

「夏になれば思い出す」といったような思い出に残る風景体験は誰でも持っている。だが視知覚像全てが記憶されるわけではない。ついさっき見た風景もインパクトが弱ければすぐに忘れてしまう。まして年月を超えて風景が記憶されるにはそれ相応の理由があるはずであり、その多くは個々人に固有のものであることが予想される。だが「民族共通の原風景」があるように日本人に固有の要因もあるはずである。それを明らかにすることは、風景をより良く理解することになる。

それゆえ本報ではアンケート調査によって記憶された風景を呼び起こし、その記憶の全体像を構造的に把握することを目的とした。それによって風景の種類による要因の重みも明らかになろう。直接的には、風景の見せ方の演出の空間の操作といった風景計画の基礎資料を得ることを期待した。

風景計画が前提であり、心理学の研究ではないので知覚のメカニズムや記憶化のプロセスには入り込まないようにした。

2. 研究の方法

記憶された風景を喚起する手段はいくつもあるが、ここでは特定のキーワードを刺激として回答者に与え、風景の絵と説明文を自由記述方式で書かせる方法を取った。回答のフォーマットは決まらなかった。数値データではないので処理は難しいが、この方法の最大の利点は自由に書かせることによって、豊かな情報を得る点にある。ただし、一部のデータについては記述は季節、時間、

天候、同行者、その時の状況等について触れるよう指示している。判断材料の極端な欠如を防ぐためである。

刺激として与えたキーワードは「印象に残った風景」「なつかしさを覚え心やすらぐ風景」「思い出すのもしやな風景」の三つである。それぞれはインパクトの強い風景

表－1 アンケート実施概要

実施年月	被験者所属	人数
《印象に残っている風景》		
昭和57年11月	千葉大学園芸学部	31名
12月	2-4年生	
昭和58年 3月	筑波大学社会工学類3年 及び同環境科学科M1年	25名
《なつかしさを覚え心やすらぐ風景》 及び《思い出すのもしやな風景》		
昭和58年11月	千葉大学園芸学部	34名
	2-4年生	
昭和59年10月	千葉大学園芸学部	33名
	2,3年生	
昭和60年 5月	千葉大学園芸学部	13名
	3年生	
昭和61年 5月	千葉大学園芸学部	12名
	3年生	

* 東京大学農学部 ** 建設省

景・原風景・マイナス評価の風景を狙いとしている。風景の記憶の全体像を把握するためにはこの三つでなければならないという理論的必然性はない。風景の記憶像を語るうえでより重要と思われるものを選び、かつバラエティに富ませたということである。

被験者は特定の大学の学生である。この集団をもって日本人の代表とすることは出来ない。ある任意の集団が記憶している風景についての分析である。だが、全く特殊な集団というわけでもないことは、以下の結果が示しているとおりである。

調査実施の概要は表－１のとおりである。

収集したデータの数とは表－２のとおりである。一人で二つ書いたものもあれば、どちらかしか答えていないも

のもいた。そのため、データ数は被験者数と一致していない。分析の途中で幾つかのデータを除外した。自由記述方式であるため、記述が充分でないものがあった。また、こちらの意図を理解していないものもあった。

データ・サンプルを図－１に示した。

なお、本報では回答例を載せるさい筆者達の責任において文を要約していることを付け加えておく。

3. 印象的な風景

「印象に残った風景」は70例集まった。記述から要因・理由の読み取れないもの14例は除外した。いやな印象の風景が3例あった。内容的には後の「いやな風景」と変わらないのでこれも除外し、53例を分析した。

表－２ データ数

	回収数	有効データ数
印象的な風景	70	53
なつかしい風景	94	66
いやな風景	66	61

表－３ 印象的な風景の整理(1) 対象側の要因(42例)

① 固定的風景	20例	② 夕日または夕暮れの色	12
③ 朝日	1	④ 桜	3
⑤ 雪	2	⑥ 夜景	2
⑦ 形	2 (漁船のかげの重なり的美しさ)		
		(吾妻連峰の「上杉謙信公」という雪形)

この風景(?)は故郷にあるばんな寺という寺院内の風景である。幼い頃に母に連れられて兄と三人で岡々行ったものであった。高校に入ってから学校からの帰り道に当たったため、よく待ち合わせ場所に使ったものだ。絵の右端の大木は銀杏で秋になると一面が落葉で真黄色になる。また、ちょうど今頃になるとお祭りがあって出店が並ぶので、その時だけはいつもと違って賑やかになる。また、重要文化財等もあって我が故郷足利市の中では足利学校と並んで観光の名所でもある。

図－１ 回答例

主として客体の風景の側に要因があるものについてその内容を表－３のように整理した。

①の自然風景として傑出した風景が印象に残ったというものが多くあった。固定的風景(風景そのもの)が印象的だったというものである。(例。「美幌峠より望む屈斜路湖」「奥入瀬溪流」など。)

そのなかに、計画の立場からは別のもので扱いたい特徴的な一団があった。一例をあげる。山に囲まれた甲府盆地を俯瞰する絵が描かれ、次のような文が添えられている。「細い道を歩いてきて大きな道路にぶつかり、視界が開けた瞬間に広大な扇状地が目の前に広がっていて、思わず息をのんだ。」

他には「山の中を歩いていて湿原に出て急に目の前が開けた」などがある。

シーケンシャルな視点の動きによってシーンが大きく転換

したのである。不意打ち的に傑出した風景が表れたためインパクトが大きかったものと理解できる。

②から⑦は要素である。地形・地被で構成される自然風景そのものよりもこのような天象・気象の何らかのファクターが印象的であったというものである。⑦を除いては普遍的なものである。夕日が多い。ところが注意するとそれらは大きく二つに分けられる。

- ① 日常生活空間での夕日 7例
(学校の帰り道、夕焼けがきれいだった) 他
- ② 日常生活圏以外での夕日 5例
(下山して見た海へ沈む夕日の大きかったこと) 他

日常生活空間かどうかというのは計画者にとって重要なことである。そこで上記の42例をそのような観点から整理した。表-4がそれである。

表-4 印象的な風景の整理(2) 日常生活空間かどうか

	固定的風景	清新化要素の添加
日常生活空間	なし	夕日(7例)、朝日(1) 桜(3)、雪(2) 夜景(2)、形(2)
非日常生活空間	傑出景(20例)	夕日(5例)

面白いことが判る。日常生活空間ではなんらかの要素が加わらないかぎり、風景が「印象的な風景」になることは

ない。当然ながら日常性はそのままでは「印象的」というインパクトを与えない。次の「懐かしい風景」と対象的である。太陽(朝日・夕日)・桜・雪・夜景等の要素により日常生活空間が清新化され、「印象的な風景」となるのである。

以上の42例はどちらかというと風景の側に主たる要因があった。他に心理側に主たる要因があるものがあった。

- ① 人生の節目 6例
(大学に合格し、入学式に向かった) 他
- ② 満足感・期待感 7例
(一浪後合格し、海を見に行った。ほっとした気分だった) 他

分析結果の纏めを構造として図-2に示す。

4. なつかしい風景

「なつかしく心やすらぐ風景」は94例回収された。

うち「なつかしい風景」は66例であった。それ以外は「心やすらぐ風景」(12例)や見当外れなもの、また情報不足で分類出来なかったもののため除外した。

育ったところが懐かしいだろうという常識的予想は覆されなかった。育ったところの風景であるし、育ったところでの体験である。だが、それも詳しく見てみると興味ある内容を含んでいる。

表-5は育ったところかどうかで分けたものである。「それ以外」に注目したい。「両親の実家」が目立つ。どんなところであろうと「育った場所」は「なつかしい」ものだが、生活空間でないだけ「両親の実家」となるとなんでもよいという訳にはいかない。条件が付こう。とす

図-2 「印象的な風景」の構造 (53例)

表一五 なつかしい風景の分類
(育ったところかどうか) (66例)

育ったところの風景	55(83%)
それ以外	11(16%)
① 親の実家	7(10%)
② 故郷を連想する要素	4(6%)
(山を見ると故郷を連想してなつかしい)	
(夕日が沈むのを見るとなつかしい)	
(朝の雨上がりの空を見るとなつかしかった)	
(いつも通る道の風景を重ねたもの)	

れば、「両親の実家」は育った場所以上に「なつかしい風景」の本質を示すのではないかと考え、内容に注目した。

一例。山を背景とした田の絵。「両親の実家のある秋田県の田舎。ただ広々とした水田が緑で覆われた山に囲まれていて小川が流れている。小学生のころ毎夏遊びにいった。」のコメント。他の6例も田や川の風景である。全回答が幼児・児童期のものであった。

「小川があって、水田が緑で、山に囲まれている」というまさに日本の原風景の農村風景がはっきりとそこに表れている。育った場所というのは各個人に属するものでまちまちである。今回も「育った下町が懐かしい」というデータがある。だが、個人の差異を取り除くと日本人の懐かしい風景はこのような農村風景となるといえるのではないか。もちろん、両親と自己との重ね合わせがあるからこそ両親の実家が懐かしいものとして出て来ているのであり、今回のデータだけでは確かなことは云えな

い。今後深く調査したい。

つぎに、「育ったところ」について懐かしいものが風景か体験かで分けた。風景が29例、体験・心理が26例であった。だが、「育った場所」での「体験」、あるいは「体験」が積み重なった「場所」であって、場所と体験を分けるのはあまり重要ではない。両方が揃って「なつかしい風景」となっているに違いない。事実、体験・場所のどちらに分類してよいのか迷うものが多かった。ただし、記述が成長段階によって異なることが判った。すなわち、風景では ① 幼いころの記憶はディテールが喪失し、断片的であること

② 小学校では風景の全体像よりも「夕焼け空」「満開の桜」など清新化要素によること

③ 中学以降では固定的風景が懐かしいものとして思い出せること

体験では ① 幼いころは「魚釣り」「凧上げ」など遊びが中心であること

② 小学校では「父が田を耕している」など生活空間の中での行為の意味を理解する学習的なものであること

③ 中学以降では「(近くの丘で) よく物思いにふけた」など自我確立期の自分の心理が懐かしいものとして出てくること

つまり、小さいころから成長段階にあわせて様々な経験・体験や印象にのこる風景要素の視覚体験を積み重ねることによって、育ったところの風景そのもの＝生活空間がかけがえのないなつかしいものとなってゆくと思われる。全体を構造として整理したのが図一3である。

図一3 「なつかしい風景」の構造 (66例)

5. いやな風景

「思い出すのもいやな風景」は66例集まった。

記述からなぜいやなのか原因が判らないもの5例を除外した。それ以外の61例を分析した。

「印象的な風景」では風景そのものがあがっていた。だが「いやな風景」では風景そのものがいやだというのは一例もなかった。「いやな風景」となるのは風景にマイナス要素が加わるか、あるいはプラスの要素が喪失したかのどちらかであった。

マイナス要素が加わったものとしては、次のものがある。

- ① 乱開発の家 「斜面林が途切れて家が立っていた」
- ② 工場 「美しい緑の山のなかに工場が立っていた」
「白い煙を吐く工場群」
- ③ ゴミ 「神社境内林の道に粗大ゴミ」
「きれいに緑化された中央分離帯の空かん」
「景色の美しい行楽地で空かん・ゴミくずのやま」
- ④ 川の汚れ 「お茶の水」「隅田川」「南千住付近の隅田川」「手賀沼」
- ⑤ 原爆 「写真でみる原爆を落とされた戦争の焼け野原」

詳しく見るとマイナス要素といっても「ゴミの風景」は単に塵があるからではない。「あってはならないところに塵がある」から「いやな風景」になっているのである。他のマイナス要素についても同じことがいえる。都市への原爆、清らかなはずの川の汚れなど、みなそうである。

プラス要素の喪失としては、次のような例がある。

- ① 故郷の林の喪失 「自分の田舎の家の周りの林が伐採された」
- ② 古い建物の喪失 「愛着を感じていた古い建物が取り壊された」

これに似たものとして喪失によるプラス要素の顕在化が挙げられる。

- ① 森林伐採 「スギ人工林の皆伐跡地のハゲ山」
「木が切り倒され土がむき出し」
- ② 山岳道路開削 「南ア・スーパー林道で山の地肌が削り取られていた」
「山が道を作るために削られ、赤茶けた崖が出来ていた」
- ③ 山の掘削 「低くなった武甲山」

森がなくなることによって、プラス要素としての森の存在に気付いたものである。

ここでは両者併せて「プラス要素の喪失」とするが、これらもマイナス要素同様場所との関係に注意しなければならない。

他に「歌舞伎町がいやだ」、「橋の赤い色が嫌だった」、「刈り込まれた木が不自然でいやだった」という、個人的な好みに属すると思われるものがあった。

「いやな風景」では以上のような対象側の空間要素・風景よりも、以下に紹介する体験・心理のほうが遥かにインパクトが大きい。次のような例である。

- ① 身の危険 「突然激しい雷雨、生命はないと思っただけだった。」他
- ② 生理的不快 「川のくさい臭い」「車の騒音」他

図－4 「いやな風景」の構造（61例）

- ③ 圧迫感 「海底トンネルの中」他
- ④ 嫌なものを見た「オートバイの死亡事故」他
- ⑤ メンタル 「しかられて、くやしくてくやしくてたまらなかった。」他

どれを見ても判るが、空間要素・風景よりも体験・心理のほうが重い内容である。事例数も後者のほうが約2倍であった。体験・心理は自分の体に係わる程度で上記の5つに分けた。これを括ると肉体的体験・情緒的体験に分けられよう。

これらを整理し、構造を示したものが図-4である。

6. まとめ

三種の風景を比較したものが表-6である。

「印象的な風景」は対象側の軸が複雑であり、「いやな風景」は主体側の軸が複雑である。「なつかしい風景」はその両方が重層的に混ざり合った構造となっている。

最後に、風景計画の立場から空間操作性・演出について述べたい。

傑出した自然風景はどう見せようと素晴らしいのではあるが、工夫を凝らし、意表をつくようにシーンを転換して見せればさらに印象的に見せる効果がある。

日常風景の清新化が印象として残っていく。仮説でし

かないが、このような印象経験の積み重ねによって、日常風景=生活空間が「なつかしい風景」へと熟化していく一つの要因となっているのではなからうか。とすれば、桜の名所や夕日が見える場所の整備は、単なる環境整備ではなくて、地域への住民の愛着を高めるための手段といえるのではないか。

「あるべき所にあるべき物がある」のがアメニティだと云われているが、「いやな風景」とはこの言い方でいくと「あってはならない所にあるべき物がない」ということになる。単に「いやなもの」「いいもの」でない点に注意を払う必要がある。場所とものの組み合わせを充分考えねばならないことを示唆してくれよう。

なお、図-2～4中の割合表示は被験者の属性（年齢等）による変動が予想され、その確かさの検証は今後の研究課題である。

また、アンケート調査の協力を頂いた筑波大学の田島学助教授および被験者の皆様に謝意を表します。

参 考 文 献

- ◎ 奥野 健男（1972）：『文学における原風景』223 p. p., 集英社, 1972

表-6 三種の風景の比較

	「印象的な風景」	「なつかしい風景」	「いやな風景」
主要軸	対象	風景の中での体験	体験・心理
興味深いこと	日常空間の清新化	農村風景	マイナス要素の添加 プラス要素の喪失
計画・操作性	シーン転換 清新化要素導入	清新化要素導入 場所による要素の配慮	場所による要素の配慮

Summary : In this study, we tried to find out the structure of landscapes which exist in memories by experience. The results are as follows :

① “Impressive Landscapes” were categorized into five types by analyzing axes of scenery—experience (objective—subjective), daily—non-daily, and refreshing elements. About 80% of those belonged to the objective type group.

② “Most dear landscapes” were those of environments where the respondents had grown up, and were categorized into six types by axes of objective—subjective and the period of the experiences.

③ “Distasteful Landscapes”, which were mainly caused by distasteful experiences in contrast with impressive landscapes, were categorized into seven types by the axes of scenery—experience, physiological—psychological and so on.